
月の桂

cassander

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の桂

【Nコード】

N9738T

【作者名】

c a s s a n d e r

【あらすじ】

高子は大人になっていった。少将は傷心を高子を手に入れることで癒そうとするが

巡り合い 再び（前書き）

伊勢物語を題材に採った恋物語

めぐり合う3人の運命

巡り合い 再び

？

姫君は、もう十四、五歳になられたか。あの夜は、まだ夜食を欲しがる子供だった。先ごろお生まれ遊ばした、新宮様が皇太子に立たれ、あの姫君はその后候補として大切に世話されている。いくら家のためとはいえまだ幼子に嫁する定めというのも、あまりに惨いと思われた。あの夜、暗がり忍んで、覗き見しておられた真っ直ぐな視線の姫を思い出すと、自然と微笑まれた。我が家の親王様こそ、次の皇太子と信じて来た者達は酷く落胆した。無論親王様ご自身の落胆振りは拝見するのも劳しい。みんな親王様こそ、この一族の最後の希望とおすがりしていた。権大納言様のご逝去、女御様のご流産を聞いた時は、皆、不謹慎な事ながら天の恵みと思った。ところが、現大納言が賢しい方で、遺児たちを皆養子とされ、家督を相続なさった。その上女御様は直ぐに懐妊なさった。遂に男皇子がお生まれになり、これで我が家の希望は完璧に絶たれた。この世はままたらぬ事ばかりだ。

私の母は内親王で、その血筋の尊貴さゆえに、私は妻の一族に婿として迎え入れられた。彼らの悦ばしげな様子が時に片腹痛かった。そのためか妻にも親しめなかった。その中で親王様だけは、才能ある帝王の器として尊敬し、睦まじくさせて頂いた。それだけに急に出家なさったのは、主ばかりでなく友をも失う事となり、世の無常を覚えた。ずっと前からいつも私の心のどこかには虚しさがあった。その空しさを忘れるために、酒と和歌と女がいた。我ながら情けない生き方だった。情けない生き方と自嘲はしても、あの一瞬の出会いから、故大納言の息女の姫君には、関心を持たずにはいられなかった。そういう方に心奪われると、その想いが心の虚しさを埋めてくれる。触れてはならぬ方と知れば、より強く心惹かれる。それが私という男だ。

しかもこの姫君の家とは、二重の因縁があった。一つは失脚なさった親王様の仇敵であったこと、もう一つは式部の君が、この一家の興隆ゆえ私から去った事。これらは私には同じ重さを持つ事件だった。まるで沈み行く船に用はないとでもいうように、式部の君は、私から去った。私を捨てて羽振りの良い受領の家刀自として暮す事を選んだ。世の人が皆私の家の没落を笑っても、ただこの方は私自身を認めてくれると甘えていたのが、我ながら口惜しい。今年の正月に、出家なさった親王様の元をお訪ねした時に覚えた悲しさやるせなさを、この先決して忘れる事はない。

昨年までは正月の挨拶に来た人で、宮家は華やかに賑わっていた。今年は、山奥の春の雪に、深く埋もれた小さな庵室に、人少なく過ぎしておられた。その侘しさ辛さは和歌に込める事もできない程だった。

・ ・ ・ 忘れては夢かと思ふ 思ひきや

・ 雪踏み分け君をみむとは ・ ・ ・

まさか、深い雪を踏み分けて、山中の小さな庵室に、あの立派な親王様の墨染めの姿を拝見するなどは、昨年の華やかな正月には思いも寄らなかった。この世の無常をお慰めしようと思うが、私の方が先に涙で物も言えなくなってしまった。冬の日暮れは早く、泣く泣く山路を戻り、数日は物思いに暮れた。

そんな時に、姫君の侍女の秋枝と言う者が、妻の侍女の縁戚の者だと解った。年頃から考えると、あの夜、姫君を呼びに来た、やや年嵩の侍女であろう。私の心は暗く意地悪く躍った。香り高い白梅に歌を付けて、その秋枝あてに持たせた。

「 ・ ・ 花の色は 雪にまじりて見えずとも

香をだににほへ ひとのしるべく ・ ・ ・

どんなに隠しても、この白梅の香りを隠し通せないように、私があなたをお慕いしている事は、もう隠しおおせません。」

この姫を手に入れる事と、親王様の辛さを晴らす事が、私には同じ

意味を持っているように思えた。

？

叔母様は中宮様になられた。今年の秋には、私は節会の舞姫を申し付けられるそうだ。それがどういう意味か、私にも、もう良く解っている。先ごろから美鳥さえ、想う人が出来たらしく、そわそわと心ここにあらずという様子で、時々目は泣き腫らしている事さえある。秋枝も私もとくに気付いていたが、本人だけが誰にも知られていないと思っているようだ。相手は我が家の小舎人らしい。中々素直でよい子だと秋枝が言った。秋枝にはすでに通う夫がいる。みんなそれぞれの人生を歩き始めた。

私は、幼子との結婚を待つ日々だ。まだ歩き始めたばかりの幼い皇太子だ。皇太子に立たれると決まってからは、しきりと式部の君の事が思いだされる。あの少将様は親王様を出家に迫いやつたと、我が家を恨んでおられるだろう。私とは何の関わりもないはずの方なのに、関わりが無い事が私には悲しかった。少なくともあの少将様に敵同然の一家の一員と嫌われているかと思うと、わびしく悲しかった。あの夜、ちらっと見ただけの人が、なぜこう何年も心に残るのだろうか。美鳥にも恋人がおり、秋枝には決まった夫がいる。私には、あの夜の流れ星のすれ違いのような、ほんの一瞬の思い出しかない。

今年になってから衣装や手回り品などを、母君が慌しく誂え始めた。お父様が亡くなって以来、初めてこの家が活気を取り戻している。

秋枝が恐々と白梅の枝を持って来た。良い香りが一段と濃く部屋を満たした。

「姫君あての文でございます。お持ちして良い物かどうかとは思いましたが、私の一存で持って参りました」

「どなたからなの」

「私の遠縁の物が、姫君にお取り継ぎをと持って参りました。ご覧

になればお分かりだと申しております」

奔放な筆跡だった。私を慕っている事だけでも伝えたいという内容の歌だった。鼓動が速くなった。読み振りと言い、筆跡の奔放さと言い、ひよつとすると、私は息苦しくなった。

「どちらにお仕えしているの」

「少将様の元にお仕えしております」

秋枝が恐る恐る答えた。やはりそうだった。

「お人違いでしょうと、お答えせよと伝えておくれ」

「このまま内裏に入られるのですか。それでよろしいのですか」

私は驚き、秋枝を見詰めた。

「文を頂いても、どうなる物でもないのよ、私には」

「思い出にはなりますわ。姫様にもその位の自由があっても構いません。美鳥といつも言っておりますの。こんな暮らしを長い間強いられて、姫様があまりにお気の毒だと」

私は何もいうべき言葉を思いつかず、昔、指先を染めた草の事を思い出していた。とうとう萎れた様子で秋枝が出て行こうとした。

「待って。これを使いの者にお渡しして」

私は少将様の文で、昔から使い慣れたしおりを包み、秋枝に渡した。「これはご愛用のしおりでございましょう」

「これしか差し上げる物が無いの。お返事をして、後で却って迷惑をかけてはならないわ。お心は忝く頂きました。長く手元にありましたのでと、申し添えておくれ」

秋枝は頷き、包みを受け取って部屋を出た。

私は月明りに手をかざした。青く透き通って美しい手だと自分でも思った。ふっくらとして小さい。艶があって指先は薄く赤かった。気付くと涙がこぼれていた。せめて長く手元で親しんだしおりを、少将様にお渡ししたかった。たとえ文の一通であっても、今お返ししては、この度の親王様の件のように、少将様の身の上の障りとなるかも知れない。私は、あの夜からずっと少将様を思ってきた。せめて普通の家に生まれてきたなら、この文に応えられた。自分の心

に従って生きられた。幼児の君であっても、もう将来の夫は決められており、一族の命運は私に懸っていた。少将様のご一族の命運が絶たれたように、今度は、私がこの家の盛衰を決める事になる。少将様の文に応える事はできない。心は決められた運命を拒絶して、悲鳴を上げていたが、それは押し殺さねばならない。

（「香をだににほへ　ひとの知るべく」とは、私が少将様に伝えた言葉。あの夜からずっとあなたをお慕いしていましたと、せめて伝えたい。あなた以外の誰を想う事があるでしょうと、ほんの一言でもお伝えできたら良いのに）

巡り合い 再び（後書き）

もう一人の女性は、
いつたいだれなのか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9738t/>

月の桂

2011年10月9日04時45分発行